

新技術 解説

ネギ圃場に設置した黄色粘着トラップに捕殺されるネギアザミウマ雌雄成虫の簡易判別法

長野県農政部農業技術課 ^{かね}金 ^こ子 ^{まさ}政 ^お夫*

はじめに

長野県では、「松本一本ねぎ」に代表される地域特産ネギの生産振興や、水田転換品目としての根深ネギの導入等により、本県におけるネギの栽培面積は2019年までの10年間で93 ha増加し、708 haまで拡大している（農林水産省，2019）。その一方で、県内広域でネギアザミウマ（*Thrips tabaci* LINDEMANN）によるネギ葉身の吸汁被害も広がりを見せている。本虫はネギ属植物のみならず、アスパラガスやキュウリ、花き類等への吸汁加害（図-1）に加え、本県の主要花きであるトルコギキョウで問題となるIYSV（アイリス黄斑ウイルス）を媒介すること（土井，2003；藤永ら，2013）、タマネギの食害痕上で *Burkholderia cepacia* complex 細菌が増殖してりん茎の腐敗が著しく増加すること（遠ら，2019）等からも、幅広い品目で適切な防除管理が求められている。ところが、全都道府県を対象としたアンケート調査によりカーバメート系、有機リン系、ピレスロイド系、ネオニコチノイド系等の殺虫剤に対する感受性低下が報告され（武

田，2014），本県でもピレスロイド剤に対する感受性が低い産雄性単為生殖型（以下，産雄系）が広く分布することも明らかとなり（長野県野菜花き試験場，2021 a），生産現場で防除に苦慮している一因と考えられる。

ネギアザミウマの防除要否の判断は、ネギ葉身の直接観察が有効である。一方で、地域における発消長の把握や防除体系の効果判断等を目的に、農業農村支援センターなどの指導機関では有色粘着トラップを用いた調査を実施している。ところが、粘着トラップに捕殺されたアザミウマは虫体が傷んでいるものが多いこと、指導機関が所有する実体顕微鏡の倍率や分解能、照明装置等がアザミウマ類の種判別に不十分なものが散見されることに加え、アザミウマの種判別には一定のトレーニングや経験が不可欠なことから、現実にはアザミウマの種判別を行わずに、捕殺されたアザミウマをすべて計数しているケースがほとんどである。加えて、本県でも発生が確認されている産雄系は外部形態により判別できないことから、指導機関からは粘着トラップに捕殺されたネギアザミウマ雄成虫を簡易に判別する手法が求められてき



図-1 ネギアザミウマ成幼虫による吸汁被害
A：ネギ葉身. B：キュウリ葉. C：カーネーション花卉.

Simple Method for Distinguishing Adult Male and Female of *Thrips tabaci* Trapped on a Yellow Sticky Trap Placed on a Welsh Onion Field. By Masao KANEKO

（キーワード：ネギアザミウマ，雄成虫，産雄系，予察，捕殺消長，簡易判別）

*前所属：長野県野菜花き試験場